YAGURA TAKUMA

整形外科学講座
高度救命救急センター
助教　矢倉 拓磨

留学先施設名

ロシア・クルガン
Ilizarov Scientific Center
イギリス・ロンドン
St. George's Hospital
ドイツ・マインツ
The Johannes Gutenberg University of Mainz

留学期間

2016.4.2〜2016.7.29

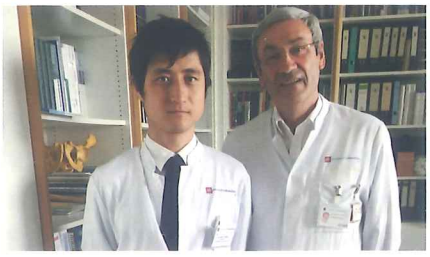
今回、4か月の海外留学の機会を得ましたのでご報告させていただきます。骨折治療の世界的非営利財団であるAO Trauma（本部：スイス ダボス）が毎年募集をかけているFellowshipに応募し合格したことがきっかけとなりました。

2016年5月から6月にかけての6週間、イギリスのNewcastle upon TyneにあるThe Royal Victoria Infirmaryへの渡航が許可され、その前後にも希望する渡航先があるなら、とのことで整形外科飯田寛和前教授から4か月の期間を与えていただきました。自身で交渉を開始し、上記のその他4施設にacceptしていただいたため計5施設の渡航計画となりました。

1施設目のRussian Ilizarov Scientific Center（Kurgan, Russia）はリング型創外固定器の発祥の地であり、発案者である今は亡きイリザロフ先生に直接の教えを受けた先生方から学ぶことができました。通常の骨折治療のみならず偽関節、変形癒合、感染（骨髄炎）、先天性奇形の手術治療まで幅広く経験し、全800床のほとんどの患者がリング型創外固定器を装着したまま歩行しリハビリテーションを行っている病棟は刺激的な光景でした。

2施設目のSt George's Hospital（London, UK）では人口の多さもあって多くの重傷患者の搬送がありました。大阪府下にある3施設の高度救命救急センターの1つである関西医科大学でも年間約50例しか経験できない骨盤骨折の手術症例を、3週間で10例も経験できたことは非常に有益でした。アプローチ法は日本に帰ってからの手術に活かせるポイントが多く、日本ではまだ使用可能とはなっていないインプラントを多用している光景も目の当たりにし、導入に向けてアプローチの改善が求められることも痛感しました。

3施設目のThe Royal Victoria Infirmary（Newcastle upon Tyne, UK）は前述のAO Trauma Fellowshipとしての6週間でしたが、温かいスタッフに迎えられ、毎日約8例、6週間で約250例の手術に手洗いして参加することができました。救急初療現場の体験もさせていただき、1日に救急車10台、ヘリコプター1台のペースで運ばれてくる骨折外傷患者への対応や、日本との外傷システムの違いを学ぶことができました。人口500万人圏に1施設の外傷センターとしての役割、非常に多くの骨折患者がシステマティックに手術へと流れていくシステムは日本にも取り入れるべき点が多くあるように感じました。



4施設目のThe Royal Infirmary of Edinburgh（Edinburgh, UK）はスコットランドにあり、イングランドであるロンドンやニューカッスルの病院との比較を楽しみにしていましたが、特記すべき様な大きな相違点はありませんでした。しかし、症例の傾向には少なからず違いがあり、執刀医によっても同じ骨折に対する治療のアプローチが違うのも興味深かったです。

5施設目のThe Johannes Gutenberg University of Mainz（Mainz, Germany）は教授のRommens先生が脆弱性骨盤輪骨折に対する分類の発案者として著明であり、小侵襲手術を学ばせていただくことを目的に渡航させていただきました。しかし不運なことに滞在中には骨盤骨折の手術症例には出会うことはできませんでした。しかしもう1人の教授であるHofmann先生の非常に上手な匠の手術をたくさんみせていただくことができたため、有意義な2週間を過ごすことができました。この4か月の渡航を通し、普段面と向かっている重度四肢骨盤骨折の治療に大きく寄与するたくさんの経験をすることができました。

最後に、このような機会を与えて下さったAO Trauma Japan、関西医科大学国際交流センター、関西医科大学整形外科前教授飯田寛和先生にこの場を借りて深く御礼申し上げます。